
最後の春休み

丁 謡

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の春休み

【Nコード】

N9959S

【作者名】

丁 謡

【あらすじ】

大学卒業後すぐに自身の母校に赴任することが決まった吉沢紫苑。学生最後の春休みの日、赴任の挨拶に母校を訪れるが…。

以前「」にて公開していました短編をこちらで公開することに致しました。以前のものをリハビリも兼ねて修正してこちらに投稿しています。

（前書き）

初めましての方もお久しぶりですの方も、どうぞよろしくお願い致します。

「吉沢紫苑さん。明日から、我が校の生活科学（家庭科）の教師としてよろしく願いますよ？」

「はい、殿村理事。こちらこそよろしく願い致します」

紫苑は5年前卒業した高校に当時世話になった家庭科教師の後任として戻ってくるようになった。

紫苑の目の前の理事はあの頃とさして変わることなく、ロマンスグレーの素敵なおじさまのままだった。女生徒たちには憧れのおじさま、男子生徒は目指せ渋い男といった感じで、学生の中でも憧れる者が少なくなかった。春休みの今も部活に来ている生徒たちが、すれ違うたびにうれしげに理事に挨拶を交わしている。その様子から、理事が変わらず生徒たちの憧れであることを紫苑は感じ取る。

「くすくす。卒業生である貴女が戻ってきてくれるというのはなんと面映いものが在りますね。貴女の代から始まった季節毎の家庭科部からの贈り物は今も続いているんですよ？」

教師や理事らを懐柔する手段として当時の生徒会が家庭科部に手伝わせて胃袋鷺掴み作戦が行われたのだ。どうやらそれは今も続いているようだ。紫苑は、にっこり笑って答える。

「いつもお世話になってる先生方への学生達からの気持ちですよ」「ふふふ。下心たつぷりのね？」

理事は肩を竦め、苦笑を浮かべて答える。

「まあ、真心たつぷりですよ」

紫苑はそ知らぬ顔で言い抜ける。

「そういうことにしておきましょう」

茶目つ気たつぷりで理事があわせてくれる。

「お願いします」

相変わらずこの人は若者に優しいと紫苑は、胸の中で独りごち、おどけて返事をする。

「さて、いつもなら新任でいらっしやった方にはわたしが校内を案内するのですが」

理事がおもねるように紫苑を見つめる。

「一人で見てまわってもかまいませんか？」

理事はにっこりと笑んで答えた。

「久しぶりの空気を楽しんで下さい。貴女は今日はまだこの卒業生の一人なのでから」

「はい」

理事の言葉に甘えて、紫苑は理事室を辞した。

「ここを訪れるのは家庭科部の追い出しコンパ以来か。」

紫苑が教育実習にいったのは母校ではなく、大学附属の高校であったため、久しぶりの母校訪問となっている。

「ここは…変わらない」

春休みまつただ中の校内はしんとして、校庭にいる運動部の学生達の声だけが校舎の眠りを覚ますかのように時折聞こえてくる。

そしてその穏やかで懐かしい空気が紫苑を5年前のあの日に連れ戻す。

家庭科部の卒業生追い出しコンパは、卒業生の予定を鑑みて3月31日の午前中から午後1時まで家庭科室で行われるのが恒例となっている。その後、卒業生たちはそれぞれ思い思いにカラオケにいたり、世話になった教師の元にいたりとまちまちだ。

コンパの終わった紫苑は夕方にまた会う約束を友人達とした後、最後にと校内を散策していた。そして特別学科等にある音楽室に辿り着いた。

「？ブラバンも合唱部も今日は練習してないんだ？珍しい。」

文化部でも珍しく、音楽系の二つのクラブは新入生の歓迎会の準備や自分達の発表会なんかで春休みも関係なく練習しているのだが、どうやら休みのようだ。音楽室のドアに手をかけた。

「開いてる。おじゃまします」

小声でいって音楽室へそつと入っていく。芸術選択が書道だった紫苑は、合唱部やブラバンに所属する友人の演奏を冷やかしくくるぐらいでめったに音楽室に足を運ぶことはなかった。

「なんか不思議だ」

他の特別科目の教室と違い階段状になった教室は少し違和感を感じる。

「でもきつと大学生になったらこの教室も当たり前になるのかな」入試を受けた大学の講義室を思い出す。そつと机の表面を手のひらで撫でたあと、教室の階段を降りてピアノの傍に行く。

「生島先生、ここでどんな顔して授業してたんだろ？」

紫苑はピアノの椅子に腰掛け、そつとピアノの蓋に頬杖をつき視線を窓の外へ向ける。桜の花びらが風に舞って流れていく。

音楽の担当教諭だった生島^{いくしま}奏は紫苑がここに入学した年に赴任して

きた教師だった。生島は面倒臭いことは嫌いだと公言してはばかりないにも関わらず、生徒から懐かれ同僚の教師からもなんだかなだ言われながらあてにされているようではあった。

そんな生島と紫苑に接点ができたのは5月の音楽祭の時期だった。生徒に質問されるのが鬱陶しかったのか、生島が家庭科室に逃げ込んできたのだ。

「かくまってくれ！」

「は！？い！？」

必死の形相の生島を目にして紫苑は慌てて準備室に生島を押し込んだ。その直後に学生が家庭科室になだれ込んできた。

『『『『カナデ先生知らない？』』』』』

その迫力に紫苑はただ首を横に振るだけだった。

『ア、あつちの非常口だわ！』

『『『『あ！』』』』』

生島を追いかけていた集団は嵐のごとく来て、去っていった。

『な、なに？なんだったのあの人達…』

取りあえず集団の気配が消えたのを確認して準備室の戸をあけた。

『あ、あの、いったみたいですよ？って、ちょっと！』

『ああ、ご馳走になってる。』

紫苑が自分にとわざわざサイフォンでたてたコーヒーをちゃっかり生島が飲んでいたのだ。

『何考えてるんです！？勝手に飲まないで下さいよ！』

『けちけちするなよ～。追いかけてまわされて喉乾いてるんだよ』

『な！？』

絶句した紫苑をしり目に、生島は図々しくも二杯目のコーヒーを力ツプに注いだ。

『美味しいな。今度からここでコーヒーをご馳走になろう』

『な、ちよっと！勝手に決めないで下さい！第一それはわたしのコーヒーです！』

『いいから、いいから』

『よくない～。』

それからなし崩しに三度続けて生島は勝手に家庭科準備室に入り込み、紫苑がコーヒーを作るのをまっていた。さすがに紫苑も諦観し、コーヒーと部活で作ったお菓子で生島をもてなすようになった。3年間その穏やかな時間は続いた。いつしかその時間がかけがえないものになっているのにも気付かないまま。

穏やかに終わった、ここでの生活を思い出し、紫苑はそつと息を吐く。

「なんで音楽選択しなかったんだろ、わたし。」

呟いてピアノの蓋をあける。躊躇うように、軽く両手の指を握りしめたが、紫苑はそつと鍵盤に指をふれ、一呼吸おいて唯一指に馴染んだ曲を奏で始めた。

唯、甘く切ないワルツが桜の花びらを誘うように流れていく。最後の音が空気に溶けて消えた。

「ブラバ」

「うひゃ!？」

突然かけられた声と拍手に飛び上がる。

「ぶっ!お前さん驚きすぎ。」

「ななな、なんでセンセがここに!？」

「ここは音楽室で隣が準備室。音楽教師の俺様がいたって不思議じゃないだろ。むしろお前さんがいる方が変なの」

人をからかうような笑みを浮かべた生島が至極真つ当な返事をよこす。

「う、ぐ」

にやにや笑いながら生島は紫苑の横に座り込んだ。

「わっ!？」

「うり、もちつと端に寄れ」

「ハア」

相変わらず我が道を突き進む生島に紫苑は早々に諦め、椅子の半分を明け渡した。

「お前さんピアノ弾けるんだな」

「アハハ、これしか弾けないんです」

「は?それだけ弾けりゃあ、他のも楽勝だろ?」

おどけているようで何やら複雑そうな色を瞳に浮かべた生島に、紫苑は誰にもいわないでいたことを告げた。

「…中学の時、手を怪我したんです。ピアニストは無理だっていわれました」

「…すまん」

顔をゆがめた生島に紫苑はすつきりとした笑みを浮かべて応える。

「もう、ケリはついてるんで気にしないで下さい。ただ…この曲だけは懲りずにずっと弾いてたから」

じつと、鍵盤を見つめる紫苑に、生島は複雑な思いが湧き上がる。

「ショパンのワルツ9番をか？」

「はい」

「この曲のことを知ってるからお前さんはああ弾いたんだよな。」
生島が自分を髪を軽く掻きむしるようにしていった。紫苑は軽く頷いて応える。

「『別れのワルツ』ショパンが婚約者に贈った曲ですね。そして、彼が死ぬまで公表せず、結婚することのなかった婚約者からの手紙と一緒に大切に持っていた曲。そこに書かれていた言葉は『我が哀しみ』」

紫苑は答えながら、何故自分がこの曲を弾き続けていたのか漸く思い到った。生島の方を見て、見つめ続けることかなわず、紫苑はそつとまた鍵盤に視線をやる。

「はあ」

「どうした？」

こぼれ落ちた紫苑のため息に、生島が心配そうに尋ねる。慌てていく島の方を見た紫苑だったが視線は合わせられず、目が泳いでいる。
「え、や、皆から鈍いといわれてたのがやっとわかったっていうか…」

じつと見つめてくる生島に、紫苑は焦って言葉を濁す。

「うう、なんでもないです」

隣にいる男に恋をしたのに今さらながら気付いた紫苑はため息しかでない。相手が教師だから無意識がリミッターをかけていたのだろう。その気持ちのはけ口がピアノに向かっていたのだ。

「で、その切ない音色は誰の　って俺は何を聞いてんだ？」

「は？なんですか？」

「なんでもない！お前さんにもうコーヒー入れてもらうこともないんだなと　！！」

自分の発言に墓穴を掘りそうになった生島は言葉を途中で止める。

「はあ？まあそうですね。ああ、後輩に頼んどきましようか？ちゃんとお茶請け付きで出すように」

「ぐ、いい！ 鈍い奴め。」

そつぽを向いた、生島の耳が心なしに赤い気もしたが、紫苑は首を傾げるだけだった。

「はあ、最後だから、今日は俺がコーヒーおごってやるよ」

「え！？」

「ほれ、俺が生徒にコーヒーおごるなんて後にも先にもないんだぞ」
「！」

「はいはい」

「！」

5年前と同じように音楽室のピアノに座っていた紫苑は今にして生島の言葉を理解した。がっくりとピアノの蓋に額を付け、深々と溜息をつく。

「ほんと、わたしって鈍い。せっかくのチャンスを逃がすあたりがどうしようもない。ハア、なんて子供だったんだろう」

そして5年前と変わることなく弾き続けているワルツを奏で始めた。同じように甘く切ない音色をのせて桜の花びらが流れ舞い散る。

「ブラバ」

変わらぬ声が紫苑の耳に届く。

春はまた廻り来る。

F i n

（後書き）

「ブラバー」は女性ソリストへの喝采になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9959s/>

最後の春休み

2011年10月7日23時31分発行